

## 2015 年度 センター試験 国語（本試験） ワンポイント解説

第1問	問1	<p>(オ)の正解の「奏上」が浮かばなかった受験生がいるかもしれないが、他の選択肢の「ソウ」の字は浮かびやすいので、消去法で選択できるはずである。</p>
	問2	<p>まず傍線中の「問題」の内容を同段落からつかみ取ることがポイント。  「教えてあげる君」は「啓蒙する人」であるから、2・3行目で「僕も啓蒙は必要だと思うのですが、どうも良くないと思うのは、ともするとネット上では、啓蒙のベクトルが、どんどん落ちていくことです」と述べている点に注目できる。また、6行目の「両者が一緒になって、…よりものを知らない人へ知らない人へと向かってしまう」という表現にも着目すれば、「問題」が人々の知的レベルが上がらないことを意味すると考えられる。各選択肢の最後の部分が「問題」の説明になっているが、人々の知的レベルについて触れている選択肢は、「社会全体の知的レベルが向上していかないことにもなる」とする③しかない。また、傍線直後の一文で「自分が知らないことを新たに知ることができる方向に向かっていった方がいい」とあり、「教えてあげる君」が新しい知識を増やそうとしていないことが書かれている。それについて触れている選択肢も③だけである。</p>
	問3	<p>傍線中の「これ」の指示内容を的確につかむこと。  直前の「誰かがふと思いついたメロディが過去に前例がある」という表現や「新しいメロディが、なかなか出てこない」という表現に注意すること。「新しいメロディが、なかなか出てこない」ということについて、筆者は「それは別に悪いことではない」と傍線直前で述べている。しかし、「メロディを書こうとする」つまり「新しい曲を作ろうとする」作曲家は、自分のオリジナル曲を作りたいわけだから、自分の作った曲がすでに前例があることが多いとなると、その曲を自分のオリジナルとすることが難しいということになる。これは確かに「厳しい」問題と言える。この点を説明しているのは②の選択肢である。</p>
	問4	<p>「歴史」の意味をつかむことがポイント。  「歴史」とは前文の「このような一種の系譜学的な知」のことであり、それは9段落で示された「時間」が介在する「因果性の別名」としての「物語」のことを意味している。以上の点をつかめれば、選択肢は②と④にしぼれるが、②は「多くの出来事を因果関係から説明し、それらから構成された物語を歴史と捉える」という部分が、『物語』とは因果性の別名」とする本文の内容に反する。また、インターネットの情報収集に関しては、8段落目で「時間軸を抜きにして、それを一個の『塊＝マッス』として、丸ごと捉える」とあり、④の選択肢では「過去の個々の出来事を時間的な前後関係から離れて自由に結びつけられる」という表現でその内容を説明している。  ②の「累積された過去に内在する多様性を尊重する」は本文に合わない。</p>
	問5	<p>「文章全体を踏まえ」とあるが、「啓蒙」について直接記述している部分は1段落と11段落なので、そこに着目する。とくに11段落が全体の話を踏まえた筆者の考えの説明になっているので、その内容と選択肢を照合すればよい。「啓蒙」が「リテラシーを形成する」行為であることと、段落後半の「僕自身は、できれば啓蒙は他の人に任せておきたい」・「僕はそれとは異なる次元にある、未知なるものへの好奇心／関心／興味を刺激することの方をやはりしたい」という表現に着目すると、その内容を述べた選択肢は②しかないと分かる。</p>
	問6	<p>④の選択肢は比較的選びやすい。選択肢後半に「肯定の立場から否定の立場に転じて論じている」とあるが、これは本文第5段落の内容と明らかに異なっている。  ③は「そのこと」と指示語で受けることは、筆者の主張を明確に強調する働きをすることになるが、次段落への接続の役割を果たすものではない。</p>

第2問	問1	<p>(ア)「透明な」は比喩表現。「石をただ見つめる」ことを「透明な行為」といっているので、「純粹」という意味であると考えられる。</p> <p>(イ)「とくとくと」は「得得と」と書く。「得意なさま」「したり顔なさま」という意味である。</p> <p>(ウ)「追い討ちをかけ」るは「さらに打撃を加えること」という意味。ここでは、はがきの案内状に加えてさらに電話で勧誘することを言っており、相手のしつこさを表すことになる。</p>
	問2	<p>傍線中の「冷たいあたたかさ」については、18・19行目の「石のなかへわたしは入れず、石もわたしに、侵入してこない。その無機質で冷たい関係が、かえってわたしに、不思議な安らぎをあたえてくれる」に対応している。②の選択肢中の「石と互いに干渉せずに向き合う」「ほっとするような孤独を感じさせてくれる」という表現が、その内容を表している。また「冷たいあたたかさが、とりわけ身にしみる」理由は、傍線前文に示された「人間関係」の疲労であり、言葉を交わす疲労である。その点に触れている選択肢も②しかない。</p>
	問3	<p>本文29行目から57行目の記述と選択肢の内容を照合することが基本。</p> <p>まず気がつくのは、各選択肢の書き出しが①から③は「初めてのテレビ収録で傷つき落ち込んでいるわたし」、④・⑤が「テレビの仕事で自己嫌悪に陥ったわたし」となっていることである。本文41行目「その当たり前のことに傷ついてしまった」、本文46行目「わたしのそんな落ち込み」に注意すると、正解は①から③にしぼることができる。「自己嫌悪」では「傷つく」を表現することはできない。その上で、本文46行目・47行目「石のように表情のない顔で、のんびりとなぐさめてくれた」、本文49行目「自信を持って決めつけるのだった」に注意すると、選択肢③が正解となる。</p>
	問4	<p>理由を問われているが、センター試験に典型的な本文内容照合の問題である。何故かを考えるのではなく、本文との内容一致を徹底すること。</p> <p>②「河原のようなアトリエにも水石の世界があることを知ってから」は、時間的な順序がおかしい。③「わたしが以前から好きだった女性詩人」が本文に書かれていない。④「テレビに出演して自己嫌悪に陥ってからは、濡れた石や雨が自分の心を慰め」が本文に合わない。⑤「昔から誰にも邪魔されない孤独を愛していた」が本文に書かれていない。正解の①では、「今までにも水辺の石を持ち帰ったりすることがあった」が本文の9行目からの段落に書かれており、同じ段落の表現から「この日は雨が降っており、様々な状況によって魅力を増す石を観賞したくなる」も内容に合うことが分かる。また、傍線直後の「ひとりひとりの頭のうえに開き、ひとりひとりを囲んでいる傘」という表現から、傘を「自分だけの世界」とすることも正しいと分かる。</p>
	問5	<p>傍線部の「何かがあるを少しづつひっばっている」は、直前の「わたしもそのとき、山形さんに、心を惹かれていたのかもしれない」を受けているので、「山形さん」との関係を表していると考えられる。その関係性に触れている選択肢は①と②しかない。傍線部前の94行目から100行目までの表現と照合すると、②の選択肢がその内容を説明していることが分かる。①では「自分にもそうした両面があることを発見し」が明らかにおかしい。</p>
	問6	<p>②48行目の「こいけさん」という表現を「山形さんの語りかけ」が「投げやりものであることを表している」とするのは明らかにおかしい。</p> <p>③「他人が拾った『小石』を軽んじる気持ちが生じた」がおかしい。</p> <p>④「石からは次第に心が離れつつある」という内容は本文に合わない。</p> <p>⑥「あふれる」「流れ出る」という動詞は、「音」を主語にしても使うことができる。</p>

第3問	問 1	<p>(ア)は「あぢきなき」の意味も重要であるが、「あぢきなき嘆き」が「男君」の心情であることに着目すれば④が選ぶことができる。</p> <p>(イ)は動詞「あきらむ(明らむ)」および願望の終助詞「てしがな」から②を選ぶ。動詞「あきらむ」は、2012年本試験でも同じく「高き手ぶりをも見あきらめばや」という形で出題されている。</p> <p>(ウ)は名詞「こころざし(御こころざし)」および形容詞「になし(似無し・二無し)」の意味から①を選ぶ。なお、注4から正解を選ぶこともできる。</p>
	問 2	<p>敬語動詞の知識と敬意の方向を問う問題である。波線部 a は、敬語の種類が問われているが、この「侍り」は丁寧語の補助動詞であることが明らかなので、選択肢は①・②・⑤に絞ることができる。波線部 b は、敬意の方向に関して「誰から」が「御方々から」か「清さだから」かが問われているが、傍線部 b はその前述部から「さだ清」の「昨日おこせし文」中に引かれていることがわかり、この時点で正解は⑤に決定できる。なお、波線部 c 「給へ」は謙譲の補助動詞「給ふ」の連用形で、敬意の方向は一人称(この場合は「手紙の書き手」)から二人称(この場合は「手紙の読み手」)へ、であることにも注意したい。</p>
	問 3	<p>女君の心情を問う問題である。傍線部 X の「恥づかし」は、3行前の「御覧ぜざらむは、罪深きことにこそ思ほさめ」という右近の台詞を受けていることを見抜けば、正解は③だと即断できる。なお、「悲し」は1行前の「昔ながらの御ありさまならましかば、……いづこにも苦しき御心の添ふべきや」という右近の台詞を受けている。</p>
	問 4	<p>手紙 A (男君の手紙) および手紙 B (女君の手紙) の内容に関する問題である。3行からなる手紙 A は、ここに含まれる和歌の解釈も含めて、口語訳をする上で何ら難しくはない。この箇所直訳さえできていれば、正解は直ちに③だと判明する。手紙 B は2行からなるが、実質的に一首の和歌である。「思はずも隔てしほどを嘆きてはもろともにこそ消えもはてなめ」は、直訳するだけで歌意は明らかであるから、ここから③を選ぶこともできる。</p>
	問 5	<p>右近の心情を問う問題である。まず、傍線部 Y 中の「方々思ひやる」を「方々(二人)を思いやる」と逐語訳すると、これに合うものとしては④「二人の気持ちを考えて」が最適である。「思ひやる」の直前を見ると『『かやうにこと少なく、節なきものから、いとどあはれにもいとほしうも御覧ぜむ』』とあり、この内容に合致するものはやはり④しかない。</p>
	問 6	<p>本文全体の内容合致問題である。選択肢の一つ一つについて、あくまでも本文の記述に照らし合わせて、慎重に吟味することが求められている。</p> <p>①は第一段落の記述と照合しているかどうかを見なければいけないが、「未練がましく言い寄っても女君が不快に思うのではと恐れて」が本文4行目の記述に合わない。</p> <p>②は「女君」が「ついには人目を忍んで男君への手紙を右近に取り次がせようとした」が、本文中の記述に全くない。</p> <p>③は「清さだは、右近から手紙が来ないことを不審に思い」以下の内容が、本文には全く書かれていない。</p> <p>④も「男君は、……東宮のもとに無理に出仕したため病気が重くなり」以下の内容が本文には全く書かれていない。</p> <p>⑤は本文の第二段落1～3行目、7行目、11行目の記述に即して作られた選択肢であり、これが正解である。</p>

第4問	問1	<p>本文中の語句の意味を問う問題である。昨年同様、(1)(2)とも漢文の重要語句ではないので、現代文で用いる語句の意味と、本文の文脈を合わせて意味を判断する必要がある。(1)は「兩小狸奴者(=二匹の子猫)」が主語であり、「其(=老猫)の乳を」に続く動詞であることと「承」の意味から⑤となる。</p> <p>(2)は「契ふ有り」を修飾しており、「猫」と「人」の話が同じ結果であることから、③が正解となる。</p>
	問2	<p>(あ)は再読文字「将」で「まさニ〜ントす」、(い)は返読文字「自」で「より」と読む。いずれも漢文の基本知識が問われている。</p>
	問3	<p>助字の読みと意味を問う問題である。助字に関しては、一文の中では読みや意味が問われたことがあるが、単独一文字で問われたのは初めてである。いずれも基本的な助字である。</p> <p>(a)「矣」は「かな」と読んで詠嘆・感動を意味することもあるが、本文中では置き字として用いられており、読まない。</p> <p>(b)「也」は「なり」と読み、断定の意味を添える。</p> <p>(c)「耳」は文末では「のみ」と読み、限定の意味を添える。</p> <p>(d)「焉」は文末の置き字で、断定の意味を添える。</p> <p>(e)「已」は文末では「のみ」と読み、限定の意味を添える。</p>
	問4	<p>著者が傍線部Aと述べた理由を問う問題である。傍線部A「ああ〜かな」は「ああ〜だなあ」と詠嘆に訳すが、「異」は「すぐれている」「不思議だ」など様々な意味があって解釈に迷う。選択肢を吟味すると、著者が傍線部Aと述べた理由は第一段落の子猫と老猫の事例を指していることがわかり、「異」の解釈にこだわらなくとも正解を導くことができることに気付く。選択肢中の「嗚嗚然」「欣然」「漠然」「居然」に注目して、それらを逐一第一段落の内容と照合して考える。</p>
	問5	<p>傍線部解釈を問う問題である。傍線部解釈の問題はまず句形・語句に注目し、次に選択肢で問われている内容について考える。傍線部Bの「何」は疑問詞で、「何ゾ」「何ヲカ」等さまざまな読み・意味を持つ。ここでは、文末が疑問形になっている選択肢はないので、「必親生」は「必ずしも親が生むのではない」と反語に訳す。さらに、注9より、傍線部Bは顕帝が皇后に他人の子供を養育することを命じている台詞とわかり、この二点から正解を導く。</p>
	問6	<p>書き下し文を問う設問は、句形・語句・語順に注目する。</p> <p>「豈独〜」は「豈に独り〜のみならんや」と読む反語形であり、選択肢②・⑤に絞ることができる。選択肢②・⑤を比較すると「与」の読み(=用法)が異なる。「与」は複数の意味用法を持ち、センター試験でも国公立二次・私大でも頻出の語句である。「人親」と「子」を並べているので「与」は「と」と読み、⑤を選択する。</p>
	問7	<p>文章全体から読み取れる筆者の考えを問う問題である。筆者の考えは、第一段落の傍線部A(=問4)、第二段落の傍線部C(=問6)に述べられている。選択肢はすべて二文から構成されており、第一文が傍線部A、第二文が傍線部Cの内容に該当している。センター試験では、このように設問を順次解答させ、内容理解を深めさせる意図の出題が多くみられる。設問どうしの関連も考慮しながら解答することも忘れてはならない。</p>